生きた本当の信仰とは

ルカ福音書17:5-10（現代訳）

17:5 それを聞いた使徒たちは主に言った。「先生のおっしゃることを伺っていましたら、今の信仰では到底駄目ですから、私たちの信仰をもっと強くしてください。」

17:6 すると、主は言われた。「信仰において大事なことは、強いか弱いか、大きいか小さいかということではなく、生きた本当の信仰かどうかということです。本当の信仰さえあれば、不可能なことは何もありません。

17:7 それを、一つのたとえでお話しましょう。あなたがたの中で、しもべがいたとして、そのしもべが畑から仕事を終えて帰って来た時、主人がそのしもべに、『さあ、ここに来て、食事をしてください』などと言って、もてなすでしょうか。

17:8 かえって、『私の食事の支度をしてくれ。そして、私が食事を終えるまで、そこにいて給仕をしなさい。その後で、自分の食事をするように』とは言わないでしょうか。

17:9 そして、しもべがそうしたからと言って、主人がしもべにお礼などを言うでしょうか。

17:10 あなたがたも同じです。自分がしなければならないことを、全部してしまった時、『私どもはつまらぬしもべです。なすべきことをしただけです』と言うのではないでしょうか。神様が私たちのすべてを支配していらっしゃることを信じるところに、生きた本当の信仰があるのです。

【祈りながら考えよう】

（１）使徒たちはなぜ「私たちの信仰をもっと強くしてください」と言ったのですか。
（２）信仰を強くすることで人を赦すことができますか。
（３）「生きた本当の信仰」を持つ人は、「神と自分との関係」をどう理解していますか。

【解　説】

（１）私たちの信仰をもっと強くしてください

自分に対してひどいことをする人の罪を赦すということは、大変難しいことである。「自分の敵をも愛しなさい」（マタイ5:44）という主イエスの御言葉を山上の説教の中で見つけて感動する人はいても、それが実行できると思う人はまずいない。

主イエスが特別に選んで使徒として立てたあの十二人の弟子も、主イエスが「もし信者のだれかが罪を犯したら、彼を忠告しなさい。悔い改めたなら、赦してあげなさい。たといあなたに対して１日に７回も罪を犯しながら、その度ごとに、『悔い改めます』と言ってあなたの所に来たなら、その人を赦してあげなさい」と言われた時、自分自身のうぬぼれや思い上がりが邪魔をして、兄弟たちを赦すことができなくなる問題がある。それで、主に願った。

「先生のおっしゃることを伺っていましたら、今の信仰では到底駄目ですから、私たちの信仰をもっと強くしてください」。

（２）大事なことは、生きた本当の信仰である

それに対して、主が答えられたのは次のことである。

「信仰において大事なことは、強いか弱いか、大きいか小さいかということではなく、生きた本当の信仰です。たとい小さな信仰でも、本当の信仰であれば、不可能なことは何もありません。」（6節／現代訳）

私たちはとかく信仰の強さ、大きさを問題にしがちである。すぐに疑ったりする信仰は、確かに弱く、小さな信仰である。しかし、それが「生きた本当の信仰」であれば、不可能に見えることも可能になる。

信仰というのは電気で言えば、電線のようなもの。電線には何の力もないが、その電線が電源につながっているならば、明るい光をともしたり、モーターを回転させたり、瞬時にしてこちらの画像や文字、あるいは音声や映像が遠い海のかなたにまで届く。これは、電線が電源につながっている時、電源から来る驚くべき力によるものである。

それと同じように、信仰それ自体に力があるのではないが、信仰とは力の源である神につながることであるから、その力の源である神から流れてくる驚くべき力が、私たちを通して働く（参考ヨハネ15:4-5）。

（３）その力をあなたがたが知るように祈っている

主イエスの直弟子たちだけでなく、今日の私たちも、信仰によって驚くべきことをすることができる。パウロは、信じる人々のうちに働く驚くべき力を体験的に知るようにと祈っているが、その力とは、実にイエス・キリストを死人の中から復活させた力にほかならない。次のように教えられている通りである。

また、神の全能の力の働きによって私たち信じる者に働く神のすぐれた力がどのように偉大なものであるかを、あなたがたが知ることができますように。神は、その全能の力をキリストのうちに働かせて、キリストを死者の中からよみがえらせ、天上においてご自分の右の座に着かせたのである。（エペソ1:19-20）

（４）私たちと神との関係を表すたとえ

主イエスは、十二弟子の求めに対して、信仰においては、それが「本当の信仰」であるかどうかが鍵なのだと言われて、1つのたとえをお話しになった。それは、こういうものである。

「あなたがたの中に、しもべを持っている人がいたとして、そのしもべが畑から仕事を終えて帰って来た時、主人がそのしもべに『さあ、ここに来て、食事をしてください』などと言って、もてなすでしょうか。かえって、『私の食事の支度をしてくれ。そして、私が食事を終えるまで、そこにいて給仕をしなさい。その後で、自分の食事をするように』とは言わないでしょうか。そして、しもべがそうしたからと言って、主人がしもべにお礼などを言うでしょうか。」（7-9節／現代訳）

ここで、主イエスがたとえとして話しておられることは、当時一般に行われていた風景である。主人としもべの関係を描いておられる。ここで「しもべ」とは奴隷のことである。

このたとえ話は、いわゆる雇い主と雇い人の関係を言っているのではなく、「主人と奴隷の関係」である。奴隷であるから、あくまでも主人の命令に従い、主人に仕え尽くす。雇い人であれば、時間が来れば解放され、自由になれるが、奴隷は四六時中（しろくじちゅう）、主人のものであり、主人に仕えなければならない。

（５）生きた本当の信仰

なぜ主イエスがこのようなたとえ話をされたのかと言うと、私たちと神との関係もそうであるからである。「神が造り主であり、絶対主権者である」ということが、私たち人間にとって、「最も基本的な神との関係」である。

そこから少しでもずれて来ると、私たちの信仰も無力になってくる。多くの人にはそのことが分かっていないため、神の力によって生きることがよく分からず、失敗を繰り返さなければならない。

だから、主イエスはこのたとえ話に続いて、こう教えておられる。

「あなたがたも同じです。自分がしなければならないことを、全部してしまった時、『私どもはつまらぬしもべです。なすべきことをしただけです』と言うのではないでしょうか。神様が私たちのすべてを支配する主権者であって、私たちはしもべに過ぎないのだということを信じるところに、生きた本当の信仰があるのです。」（10節）

私たちが悪魔の支配下から神の支配下に移された時、私たちは神の主権（しゅけん）の下におかれたわけで、神の奴隷となったことは明らかである。神の奴隷として生きるということと、奴隷根性（どれいこんじょう）を持って生きるということは、全然別のこと。奴隷根性（どれいこんじょう）には喜びはない。しかし、神の恵みの救いによる「神の奴隷」には本当の自由があり、喜びがある。

私たちは、神によって造られた者たちであるだけでなく、神の恵みによって罪から救われた者たちである。神は造り主であると同時に、救い主でもあられる。

私たちキリスト者は、キリストを主と仰ぐその奴隷である。罪の鎖から解き放たれ、喜びと感謝にあふれた生活に変えていただいた。私たちは主イエス・キリストを喜ばせたいという思いを抱いている。私たちキリスト者は、神の恵みによって救われた者であることを覚えておかないと、信仰生活において力強い働きができなくなってしまう。

（６）力強い働き

この「力強い働き」とは、この文脈で言うならば、「自分に対してひどいことをした人を赦す赦し」ということである。もちろん、力強い働きというものは、まだほかにもある。多くの人を救いに導く働きもあるし、病気をいやしたり、悪霊を追い出したりする働きもある。

しかし、力強い働きと言う時、とかく見落としがちなことは、自分のうちにある恨（うら）み、憎しみの問題の解決である。こういう問題は、生きた本当の信仰による以外に解決することはできない。

主イエスがここで言おうとしておられることはそのことである。私たちキリスト者は、主から任された働きを力一杯やるが、それを出来たからと言って誇ることはできない。「私どもはつまらぬしもべです。なすべきことをしただけです」と言うだけである。神の恵みの力によって出来たにすぎないからである。